

第5回万葉文化館主宰共同研究 海外における記紀万葉の受容に関する比較研究 —翻訳にあらわれる日本文学の特色について—〈概要報告〉

井上 さやか

1 はじめに

第5回万葉文化館主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特色について—」（研究代表者：井上さやか）は、平成26年4月1日～平成28年3月31日の2年間に亘り実施された。

本共同研究の主眼は、文字通り「海外における記紀万葉の受容」について、ことに可能な限り多言語の具体的な翻訳事例を取り上げて比較研究することにより、古代の日本文学・日本文化の有する特徴や、その国際的な普遍性について探ることにあつた。

これまでも、「比較文学」や「比較神話学」などの研究分野は存在したが、とくに日本においては個人研究が主体であることから、その個人の習得言語によって比較する事例も所属する学会も限定されてしまい、複数言語を横断的に比較できる機会は少なかったといえる。また、ともすれば安易に国や文化の優劣を言い、自国の文学や文化を讃仰することに終始するきらいもあつた。

そうした状況の中、本共同研究を実施することによって、各言語・文化の研究者と日本文学の研究者が一堂に会してディスカッションできることとなり、より専門性が高く、しかも多角的で建設的な成果がもたらされると考えた次第である。

2 共同研究実施概要

本共同研究では、まず19世紀頃から現代にいたるまでの『古事記』『日本書紀』『万葉集』を翻訳・研究した文献等をできる限り把握することを目指した。さらに、個別の翻訳事例を取り上げて、それぞれの国や地域の人々が日本古代文学とどう向き合ってきたのか、日本文化という異文化を紹介する際に、何が翻訳され、何が翻訳されなかったのか、また、それらが各時代毎の日本文学研究史とどう切り結ぶのかなどを、各国言語の専門家を交えて、日本国内の文学研究史の側からも検証した。

現時点で少なくとも、フランス語・ドイツ語・英語・中国語・韓国語・イタリア語・チェコ語・ロシア語・ポルトガル語・スペイン語・ルーマニア語・ノルウェー語・スロバキア語・タミル語・エスペラント語等に翻訳された『古事記』『日本書紀』『万葉集』があることが確認されている（部分訳を含む）。

今回の共同研究会の実施に際しては、各国言語の専門家をお招きして直接議論することにより、日本文学・日本文化の国際的な普遍性と固有性について、有意義な知見を得ることができた。研究テーマに合致する専門性を有した共同研究員として、ドイツ語・英語・中国語に堪能な文学研究者にご参集いただき、さらに各回の研究会において適宜ゲスト講師をお招きすることで、チェコ語・イタリア語・フランス語等における翻訳状況についてもご教示いただいた。

研究期間内に実施した共同研究会は以下のとおり（会場はすべて万葉文化館）。

第1回研究会 2014年9月20日(土)

第11回公開シンポジウム視察／共同研究の趣旨説明／共同研究員自己紹介

第2回研究会 2014年9月21日(日)

ちりめん本『東の国からの詩の挨拶』についての報告と館蔵本リスト(井上)

各国語訳本暫定リストの提示／今後の実施計画と研究方法についての討議／万葉文化館所蔵本の実見

第3回研究会 2015年1月10日(土)

「バジル・ホール・チェンバレンの依拠した万葉研究」竹本晃当館主任研究員

第4回研究会 2015年1月11日(日)

「A Short History of Research & Translation of East Asian “Classics” in English」

ジェイソン・ウェップ氏(南カリフォルニア大学准教授)

第5回研究会 2015年2月20日(金)

「19世紀における欧州の万葉歌翻訳—プフィッツマイアー著『萬葉集歌鈔』の調査報告—」小倉久美子当館主任研究員

第6回研究会 2015年2月21日(土)

「『古事記』と『万葉集』のチェコ語訳について」

カレル・フィアラ氏(福井県文書館副館長) ※ゲスト講師

第7回研究会 2015年7月25日(土)

「プフィッツマイアー著『詩選』について」

加藤耕義氏(学習院大学外国語教育研究センター教授)

第8回研究会 2015年7月26日(日)

「GUSTAV HELDTS 著“THE KOJIKI: AN ACCOUNT OF ANCIENT MATTERS”における『古事記』の訓と解釈—口承性をめぐって—」井上さやか

「周作人と『古事記』の翻訳」曹咏梅氏(神奈川大学非常勤講師)



第6回研究会



第7回研究会



第9回研究会



第10回研究会

第9回研究会 2015年11月7日(土)

「イタリアに於ける日本学・日本上代文学」

マリア・キアラ・ミリオレ氏(イタリア国立サレント大学教授) ※ゲスト講師

「イタリアにおける記紀の翻訳」

アントニオ・マニエーリ氏(ナポリ大学東洋学研究所研究員) ※ゲスト講師

第10回研究会 2015年11月8日(日)

「万葉集の英訳について」

マイケル・ワトソン氏(明治学院大学教授) ※ゲスト講師

「『万葉集』の歌三首から「おほほしく」をどう解釈し、フランス語に翻訳するか」

ジュリー・ブロック氏(京都工芸繊維大学教授) ※ゲスト講師

第11回研究会 2016年2月20日(土)

「『万葉集』の写本・注釈書とその流布状況の基礎研究」大谷歩当館主任技師

第12回研究会 2016年2月21日(日)

研究総括及び研究成果公表についての打ち合わせ

3 翻訳事例の比較研究の意義と可能性

近現代の外国語訳の比較研究がなぜ日本古代文学の研究に繋がるのか、と疑問に思う方もおられることと思う。しかし、日本古代文学の外国語訳とは、翻って日本古代文学そのものの特色を浮き彫りにしてくれるものでもある。

翻訳学の定義に拠れば、同じ言語において古典文学を現代語に訳すのもまた「翻訳」である。国内外を問わず翻訳事例を検討することにより、何が「翻訳」でき何が「翻訳」できないのかがよくわかり、優劣などではなく、これまで見過ごされてきた問題点を示唆してくれる可能性がある。

そもそも日本文化は、その誕生の時から国際的な視野に立つことで形成された、いわば「翻訳」を抜きにしては成立し得なかった文化である。

たとえば『古事記』『日本書紀』『万葉集』は、現存する日本最古の神話や歴史を記した書であり、和歌集である。これらの書物が生まれた当時、日本は漢詩文を吸収し咀嚼して、単語や熟語だけでなくそれらに伴う思想や概念を含む大陸文化をたくみに取り入れた。いわゆる「万葉仮名」による日本語表記を試み、和歌の定型化等もはかかったとみられている。法律をはじめとする、現代に繋がるさまざまな国の仕組み等も、同様にこの頃に導入整備されたことは周知の通りである。異文化をもとにしながらも、それらを「翻訳」した上で独特の文化として醸成させたといえる。

それから約1000年後、『古事記』『日本書紀』『万葉集』はふたたび「翻訳」され、国外にひらかれた。明治時代以降、日本は今度は西洋文化を盛んに取り入れることで大変革を遂げた。軌を一にするように、いわゆる“お雇い外国人”らによって万葉歌や日本神話が日本文化の象徴として研究され、フランス語・ドイツ語・英語等に翻訳され、紹介されていった。

そうした日本古代文化への興味関心は、明治・大正時代にとどまらず、今なお広がり続けており、学術的な研究も深められている。2006年に奈良県主催の「NARA 万葉世界賞」が創設されたのも、そうした国際的な研究状況を踏まえてのことであった。同賞は現在までに4回実施されており、第1回ジェニ・ワキサカ氏(ポルトガル語)、第2回王暁平氏(中国語)、第3回エドウィン・クランストン氏(英

語)、第4回アントニー・リーマン氏(チェコ語)の研究業績が受賞している。

「翻訳」事例を比較検討することは、直接的には過去の研究成果の検証といえるが、現在の研究の意義や位置付けを客観視することにも繋がり、同時に未来の研究指針を得ることにもなると考える。

2020年には『日本書紀』編纂1300年という節目の年を迎え、東京オリンピックも開催される予定であり、諸外国の日本文化への興味関心も高まっている。ともすれば現代日本文化だけがクローズアップされ、その基層に古代文化があることは見過ごされがちである。しかし、本共同研究でも明らかにされたとおり、かつて諸外国は当代の日本文化の奥に古代の『万葉集』や『古事記』を見て「日本」への魅力を感じ、古代日本文学を翻訳し紹介した。同じ現象は、現代においても繰り返されている。

例えば、2014年には英語による『古事記』の新しい全訳が出版された(GUSTAV HELDT “THE KOJIKI: AN ACCOUNT OF ANCIENT MATTERS”, 2014 Columbia University Press)。これは日本について学ぼうとする大学生向けの講義用テキストシリーズの1冊であり、意識的に注等が省かれ読みやすさが追求されている。かの国でも、若者の興味はアニメやゲームといった現代日本文化に向いているが、そうした風潮の中で古典であるKOJIKIに触れ、現代日本文化の根底にある古代日本文化に気づく機会をもたらすだろう。

本共同研究の成果が、こうした新しい魅力を発信する際にも役立ち、今後の日本文学・日本文化研究に資することを願う。

4 おわりに

各国言語による日本語文化の「翻訳」を空間軸での比較とするならば、現代日本語による古代日本語の「翻訳」は時間軸での比較である。そうした空間軸・時間軸ともに広がりのある「翻訳」という視点で日本古代文学を読み直してみたとき、従来とはまた違った論点が浮かび上がってきた。

共同研究期間を終え、2016年10月2日(日)には研究成果発表の一環として、「第13回公開シンポジウム 万葉集翻訳の夜明け」を当館にて実施した。登壇者は、第5回主宰共同研究の主要構成員であった、加藤耕義氏、ジェイソン・ウェップ氏、曹咏梅氏、当館研究員3名(小倉久美子、大谷歩、筆者)であり、各自の個別報告とともに、ディスカッションでは『万葉集』巻4522番歌を具体例として取り上げ、ドイツ語・英語・中国語訳と日本国内の注釈書類の当代語訳を比較検討した。

当日の参加者も例年の公開シンポジウムに比べて多かったが、当日参加できない方々の事前・事後の問い合わせ件数も多く、本共同研究テーマへの関心の高さがうかがえた。多言語を横断的に比較することに加えて、外国語訳だけでなく国内における当代語訳の状況をもあわせて比較する試みが、一定の評価を得たものと理解している。

本誌においては、上記の共同研究員に加え、研究会開催の際の招聘講師の方々にも御論攷をお寄せいただいた。各論は主に取り扱う資料等のおおよその年代順に掲載した。

ご多用の中、本共同研究に時間を割いてくださった皆様に、この場を借りて御礼を申し上げます。